

針の印のところまで針が進んだら、そこで針を固定し、十分吸引試験を行なつてよい局麻剤を 5 cc 注入する。つぎに空気を 2 cc 程注入してから針をひきぬく。これは局麻剤が針をぬくさい paravertebral nerve については麻痺がくるのを予防するためである。

以下皮膚よりの深さがわかっているため、ブロックは針を横突起に当ててみる必要がない。L_{2,3,4} を両側で計 6 カ所で行なう。

効果が出ると下肢温は上昇し、汗は出なくなる。また紅潮し、血管拡張してくる。知覚麻痺はこない。

合併症

局麻剤中毒、脊麻、血管収縮剤による反応、神経麻痺などが起こることがある。

このブロックは外来通院患者に行なうことができるので、ブロック後約 1 時間位様子をみてから帰宅させることが必要である。局麻剤に血管収縮剤を用いる必要はない。皮膚よりの深さは 1 回みるだけでよい。入院患者では、脊麻か仙骨麻酔をこのブロックのかわりに行なう場合もある。

もし針が深く入りすぎて、腹膜、後腹膜臓器、腹腔臓器等を穿刺してもほとんど大きな事故とはならない。

下肢の循環は L₂ の交感神経節がもつとも重大な効果を有するが、L_{3,4} がブロックされればさらに良い結果が得られる。また、もしはじめが不成功なら、やり直した方がよいと考えられる。

* * *

□ 書 評

整形外科診断必携

<監 修>

慶大教授 岩原 寅猪
慈恵医大教授 片山 良亮
日大教授 佐藤 孝三

<編 集>

慶大助教授 池田 亀夫
東大助教授 松本 淳
慈恵医大助教授 丸毛 英二
日大助教授 鳥山 貞宣

従来小さな整形外科の書物は 2~3 出版せられてはいるが、それらは全く医師国家試験に合格するに必要な最低の知識をもちこんだものであり、大学教育を受ける人々にとってはあまりにお粗末と感じるものが多い。今回の書物もそんなものではあるまいかと思ひながら頁を繰ってみるとなかなかどうして細かいところによく気のついた書物である。各種の整形外科的疾患の診断の要点をきわめて簡潔に書いてあり、しかもこれらは古い教科書を要約したものではなく新しい感覚で処理せられている。ことに Syndrome を一括して第 3 章に集めてある。元来このような人の名前を冠した症状は決して好ましい表現の方法ではないが、現実にこれが多数使用せられているのでこれを簡単にひき出すにはこの書物は頗る便利である。しかし何と言つてもこの書物の一番の圧巻は第 4 章の Synopsis である。これは整形外科の色々の検査

方法を一括して示してある。もちろんこのような方法は大きな書物では一応書いてあると思われるが、それを探し出すことはなかなか大変だろうし、さらにこの書物を詳しく読むと整形外科の専門書から少し外れた境界領域の検査方法も記載してある。

さて誰がこのような書物を書いたかと表紙を眺めると監修の 3 先生は整形外科の老大家であるが、実際の編集をしてある池田、丸毛、松本、鳥山の 4 氏のお知恵だろうと思う。流石は日本整形外科学会の新進気鋭の学徒らしい編集であつて、整形外科の実際の診療に携さわられる方々のポケットには是非 1 冊は入れておきたい書物である。

(九州大学教授 天児 民和)

[B 6 判, 337 頁, 図 157, 写真 9, 円 2,500, 千 150 医学書院刊]